

# 上古中國語の否定詞「弗」「不」の使い分けについて

——批判説の再検討——

大西克也

## 一 序論

古代文獻に見られる否定詞「弗」「不」の相違に關して、「弗」は「不」よりも強い否定を表わすという解釋が古くから行われてきた。これに對して現代の學者丁聲樹氏は、『釋否定詞「弗」「不」』に於て『左傳』『禮記』をはじめとする秦漢以前の古籍數種を調べた結果、「弗」は

。雖有嘉肴、弗食、不知其旨也。雖有至道、弗學、不知其善也。

(禮記・學記)

。姑姊妹女子子已嫁而反、兄弟弗與同席而坐、弗與同器而食。(禮記・曲禮上)

の如く目的語を伴っていない他動詞・介詞を否定するのに専ら用いられるのに對し、「不」はこのような制限をもたないことを見出し、そこから「弗」は代名詞目的語「之」を内包する否定詞、即ち意味上「不之」に相當する否定詞であるとの解釋を提出した。丁氏說によれば、上例の「弗食」「弗學」はそれぞれ「不之食」「不之學」(或は「不食之」「不學之」)に等しいものとして理解される。本稿ではこれ

を「弗」「不」の分用乃至は「分用説」と呼ぶことにしたい。

その後 Booberg、呂叔湘、Graham 氏等の學者によつて、禁止を表わす否定詞「勿」「毋」の間にも同様の區別のあることが見出され、「勿」は意味上「毋之」に相當すると解釋されるとともに、「弗」「勿」はそれぞれ「不之」「毋之」の合音によつて生じたという音聲的な説明も試みられた。Booberg 氏は「弗」についての合音の過程を次のように表わしている。

弗 \*p'iat + 不 \*p'ian + 之 \*t'i

しかし一方では、甲骨文・金文・『尚書』など、更に古い時代の文獻に於ては分用説の成り立たないことが、呂叔湘(一九四二)、周法高(一九五三)氏らによつて明らかにされた。更に分用説に對する全面的な反論が黃景欣氏(一九五八)によつて提出され、相當な影響を與えているように見える。現在に至るまで黃氏に對する本格的な再反論はなされておらず、また近年出版されている古代文法、語彙關係の論著の中でも分用説に従うものは多くない。

「弗」「不」「勿」「毋」に關する分用の存否は、上古中國語の否定詞の意味や用法の解明にとつて重要な問題であるがそればかりではな

く、このような使い分けが果たしてあるとした場合、そしてそれが前記の如き合音の結果であるとするならば、それは口語に於て成立した自然發生的なものとしてしか理解できない現象であるから、當時の文語と口語との關係、換言すれば當時の文語の性格の一端を探る手がかりともなしうるのである。このような意味で、分用説の成否を見極めておくことは充分に意義のあることと思われる。

そこで本稿はこの問題に關するこれまでの諸説、特に黄景欣氏の分用説批判を中心にそれらの論點を整理・再検討し、あわせて私の考え方を明らかにしたい。但し紙幅の關係上おもに「弗」「不」の分用に ついて検討し、「勿」「毋」については附隨的に言及するにとどめたい。

## 二 黄景欣氏の「假象」説

黄景欣氏の分用説批判は、一九五八年に發表された同氏の『秦漢以前古漢語中的否定詞「弗」「不」研究』に展開されているが、黄氏が丁氏らの分用説を却ける最大の根據は、秦漢以前の文獻に分用規則に對する例外が少なくないという點である。黄氏は『尙書』を除いても、

- ・ 始吾敬子、今子魯囚也、吾弗敬子矣。(左傳・莊公十一年)
- ・ 王公由之、所以一天下臣諸侯也。弗由之、所以捐社稷也。(史記・禮書)

など五十例以上に及ぶ例外のあることをあげて、分用説に對する反證とした。とはいえ甲骨文・金文・『尙書』等を除く「弗」の用例の多數が目的語を伴っていない他動詞を否定するものであることは動かし難い事實である。これを説明するために黄氏は、「不」が他動詞を否定する場合にも、

上古中國語の否定詞「弗」「不」の使い分けについて

・ 秋、五大夫季子類以伐王、不克、出奔濫。(左傳・莊公十九年)

の如く目的語を伴わない例が多いこと、「弗」の用例數が『論語』で僅か四例、『禮記・檀弓』で二八例など、「不」の用例(『檀弓』では一九〇例以上)に比べて非常に少ないことに着目し、先秦の古辭では「弗」の使用はもとと少なく、加うるに否定文が目的語を伴わないのが當時一般の慣例であったために、「弗」が目的語を伴う例が僅少だという一種の「假象」を造りあげたにすぎず、「弗」「不」の否定副詞としての機能は全く同じだと結論づけたのである。

しかし私は黄氏の論に賛成できない。『禮記・檀弓』を例にとれば、二八例の「弗」のうち、二例が目的語を伴った他動詞を否定している。

- ・ 葬日虞、弗忍、一日離也。
- ・ 喪三年以爲極、亡則弗之忘矣。

また、自動詞を否定する例が一つある。

- ・ 既葬、皇皇如有望而弗至。

これら三例の異例を除く二五例はすべて「不之」に讀みかえることができる。たとえば、

- ・ 子路有姊之喪、可以徐之矣、而弗除也。
- ・ 戰于郎、共叔禹人遇負杖入保者息、曰：「使之雖病也、任之雖重也、君子不爲謀、士弗能死、不可。」
- ・ 違而君薨、弗爲服也。

一方、「不」の用例一九六のうち、目的語を伴っている他動詞を否定する例は七六にのぼり、決して「否定文が目的語をとらないのは一般的慣例であった」とは言えない。しかも、目的語を伴った他動詞を否定する用例が全用例中に占める割合は、「弗」七% (二二八)、

「不」三九%（七六／一九〇）と大きくかけ離れている。「弗」の用例が相對的に少ないとはいえ、この差異はやはり有意義なものと考えざるを得ないであろう。

このように黄氏の批判は分用説を論破していないと思われるのであるが、ひるがえって分用説を承認しようとするれば、黄氏のあげるように相當多くの例外があると見られることを如何に説明するか、この問題が問われることとなる。

### 三 例外に對する説明

先秦・秦漢の古籍中に、「弗」「不」の分用規則に對する例外が若干數あることは、丁聲樹氏も認めている。しかし丁氏は、例外が特に多いのは『尙書』であることなどを理由に、後人の傳寫の際に生じた譌亂であると斷じている。けれどもこの解釋が妥當でなく、『尙書』は甲骨文・金文などの古い文體を繼承するために分用説があてはまらな<sup>①</sup>いと見るべきこと、既に周法高氏らの指摘したとおりである。そこで問題は、『尙書』以外の古代文獻に於ける例外をどのように評價し説明するかということになる。呂叔湘氏（一九四一）のように例外を非常に少ないとみて、分用規則の設定を妨げないと考える學者もいるが、黄景欣氏のようにその多さを重視する人もある。太田辰夫（一九六四）・鈴木直治（一九七五）・Pulleyblank (1978) 氏など、この面から黄説に傾く人も少なくない。

黄氏が擧げる例外五五例（『尙書』を除く）は、目的語として「之」を伴なうもの二二例と、その他三三例とに分けることができる。ところが後者について検討してみると、黄氏が原文を誤讀しているものや、必ずしも例外とはいえないものが半數近く含まれている。たとえ

ば、

・宗子爲殤而死、庶子弗爲後也。（禮記・曾子問）  
に關しては、「爲」は二重目的語をとりうるから、「弗爲後」は「不爲之後」と讀みかえることができる。また、

・韓子請諸子產曰「日起請夫環、執政弗義、弗敢復也。」（左傳・昭公一六年）

の「弗義」を、黄氏は形容詞を否定した例であると言うが、この文は「義」を形容詞の意動用法と解釋して、「この間私はかの環を下さいませようお願ひしましたが、執政どのはそれをよろしいとお考えになりませんでしたので、私はくりかえしお願ひいたしかねました。」と讀まなければ意味が通じない。このような誤りや不確かなものを除くと、確實な例外といえるものは私の見るところ一七例である。その内容は、一四が普通名詞の目的語を伴なう例で大半を占め、残る三例が形容詞・自動詞を否定する例である。しかしこれらの中には、衍文や誤寫によって生じたと解しうるものが數例含まれているので、實數は更に減るかもしれない。たとえは、

・今世行之、後世以爲楷、適弗逢世、上弗援、下弗推。（禮記・儒行）  
の「弗逢世」は、もとの「不逢世」を下の二つの「弗」に引かれて「弗」に誤寫した例である可能性がある。衍字・誤字は、もちろん「之」を伴なう例外についても若干はありうるであろう。

このように例外は黄氏の擧げる程多くはないと考えられるのであるが、目的語に「之」を伴なう例外が、實質的例外の恐らく半ば、或は半ば以上を占めていることに注目したい。この種の例外が多いことは、夙に Graham 氏も指摘した所であり、それについての説明もこれまで試みられていた。

呂叔湘氏は近世の中國語に於て疑問詞「什麼」がつづまって「甚」になり、代名詞「咱們」がつづまって「偌」になった一方で、「甚麼」「俺們」のような形が併存していたことになぞらえて、「弗之」の連用を解釋している。つまり「之」が前字「不」の韻尾を同化しつつ、自身の音節としての獨立性をお保存した形が併存していたのである。これはありうるのだが、この説明では、

。大國亦弗之從而愛利。(墨子・非攻中)

のような例外は説明できても、

。雖與之俱學、弗若之。(孟子・告子上)

のような、「弗」に否定された動詞が目的語「之」を伴う例外は説明できない。

兩種の例外を統一的に説明したものととして、周法高氏は、「之乎」のつづまった「諸」が更に「諸乎」と連用され、「而已」のつづまった「耳」が更に「而已耳」と連用されることがあるのと同様の特殊用法であるとの説を、一つの可能な解釋として述べている。恐らくこれは語源意識の弱まりによって可能になったということであろう。

しかし、もし「弗」の韻尾が「之」の意味を表わすという意識が薄れたならば、「弗」に否定された動詞の目的語として「之」以外の代名詞・名詞の立つことが更に少ないことはどのように説明されるであろうか。思うに、「弗」「勿」に「之」が内包されているという意識はなお存在していたが、ただそれがやや薄れていたために、「之」の意味をはっきりさせたい氣持ちが働く時には、「弗+動詞+之」若くは「弗之+動詞」と言うことがあったのであろう。但し「弗之+動詞」の中には、呂叔湘氏の言うような原因による用例もあるかもしれない。

上に述べたことは、日本語で「最大」と言えば「もっとも大きい」という意味であることを知りながら、時として「今世紀になってもっとも最大の事件」などと言うことがあるのに似ているかと思われる。そして「ある程度最大の事件」とは決して言わないのは、「弗」と共起する目的語が「之」に限られる傾向と符合する。換言すれば、意味的な重複は許容されるが意味的な不整合は許容されにくいということなのである。

周法高氏は、「弗」と「之」とが共起すると、次の例のように文末に「矣」が用いられることが多いことを指摘している。

。君子曰：無節於內者、觀物弗之察矣。(禮記・禮器)

。雖與之俱學、弗若之矣。(孟子・告子上)

これらも、「之」をはっきり示す表現はある種の強意を伴ったために、助詞「矣」と呼應し易かったと理解することができよう。

以上は「之」を伴う例外について、分用説に沿った説明の途があることを述べたが、「之」を伴わない例外についてはどうか。その一つとして古い文體の影響と見られるものがある。たとえば、

。策書曰：「自此之後、不作信順、弗蒙厥祐、天年隕命、哀哉。」

(漢書・王莽傳)

のような例であれば、『尚書』等の文體を模倣したと見なせるであろう。但しこれは例外のごく一部にしかあてはまらないと思われる。注意されるのは、「之」を伴わない例外の多くが「弗+動詞+名詞」型の例によって占められ、「弗+自動詞」「弗+形容詞」は非常に少ないことである。ここから(上記古體によるものを除き)口語にあって「弗+動詞+之」の類推により「之」の位置に一般名詞も立ちうるようになりつつあった傾向が、文章語に露頭を見せているのだと考え

ることができる。勿論これは一つの推測であり、またこの類型に属さない例外もごく少数ながら存在するが、これらは音韻法則に對する例外の扱いと同様に、例外と認めたくえで、例外をもたらしした原因を別の問題として追及することが許される、という程度の存在であろう。

以上を要するに、「弗」「不」には「假象」とは考えられない著しい分用の傾向があるということから、丁聲樹氏らの唱えた分用規則を認めることは妥當であると判断される。そしてその規則には、「目的語として『之』を伴う場合には否定詞『弗』を用いうる。」との但書きを付け加えるのが適切であろう。

#### 四 馬王堆帛書の「弗」

黄景欣氏も指摘するように、古代文獻の現行本には、『論語』のように「弗」の用例の極めて少ないものがある。『老子』もその一つである。例えば武英殿王弼注本では「弗」は僅かに二例、道藏傳奕本に至っては一例も用いられておらず、他の諸本でもその用例数は一、二例を出ない。ところが馬王堆帛書に含まれる『老子』（甲本・乙本）には「弗」が多数用いられている。朱德熙・裘錫圭氏は、七十年代に出土した竹簡・帛書が古代言語・文字の研究にもたらす影響の例として、馬王堆帛書『老子』、銀雀山竹簡『孫子』・『晏子』に於ける「弗」が今本では多く「不」に改められている事實をあげ、「弗」「不」の區別を論ずる際には當然これら出土本に據らねばならないと述べている。但し實際の區別如何については記されておらず、また今本でなぜ「弗」が「不」に改められているのかについても觸れていない。そこで今、馬王堆本『老子』ならびに其他の馬王堆帛書について私が調べた結果を述べ、前章までの所論の追證としたい。

なお、秦漢時代の出土文獻に於ける「弗」「勿」の用例調査としては、馮春田氏の『睡虎地秦墓竹簡某些語法現象』があり、雲夢秦簡では「弗」の用例の大多數については丁聲樹氏の分用規則が当てはまるとしながら（例数などは明示されていない）、全部で五例の例外があることにより、この資料には丁氏の合音説（この場合は「弗」が意味上「不」に當たることを指すと解される）は適用できないようだと結論づけている。しかしこのような見方が恐らく妥當でないことは、前章で述べたことから明らかである。

馬王堆帛書は一九七三年末、湖南省長沙市の東郊、馬王堆三號墓より出土した。『發掘簡報』によれば、この墓は漢の文帝の初元一二年（前一六八年）に軼侯利蒼の子（名は未詳）を埋葬した墳墓であるとされる。<sup>①</sup>

帛書の中には破損の著しいものや、『醫書』の如く讀解の難しいものもあるので、今回の調査には『老子乙本』、『老子乙本卷前古佚書』中の『經法』・『稱』・『道原』、『老子甲本卷後古佚書』中の『五行』及び『戰國縱橫家書』を用いた。<sup>②</sup> これらの諸書の抄寫年代は、いずれも晚くとも惠帝若くは呂后稱制期のものとされ、また成書年代は、異説もあるものの『老子』を含めてだいたいは戰國後期から漢初にかけて成立したとされる。<sup>③</sup> 従って馬王堆帛書は原著の成立に極く近い時期の寫本であり、この點で非常に貴重な資料である。

馬王堆帛書における「弗」の用法の調査結果は左のとおりである。まず用法別に若干の用例を示し、更に各書ごとの用法別統計表を付す。

(a) 目的語を伴っていない他動詞・介詞の前に用いられた例（六一六例）

1: 含德之厚者、比於赤子。螽(蜂)虺(蠶)虫(虺)蛇弗(赫)螫(螫)、

據鳥孟(猛)獸弗捕(搏)。(老子一九一行上)

2: 不受祿者、天子弗臣也。(稱一四六行下)

3: 因地以爲資(資)、因民以爲師。弗因无懷(由)也。(稱一五二行下)

4: 能誰(進)之爲君子、弗能進、各止於其里。(五行三〇六行)

5: 燕・趙破宋肥齊、尊之、爲之下者、燕・趙非利之也。燕趙弗利而執(勢)爲者、以不信秦王也。(戰國縱橫家書二二六行)

(b) 目的語を伴なう他動詞・介詞の前に用いられた例(全二〇例・全例を擧げる)。

6: 萬物歸焉而弗爲主、則恒无欲也、可名於小。萬物歸焉而弗爲主、可命(名)於大。(老子二四九行下)

7: 故唯執【道】者能上明於天之反、而中達君臣之半(畔)、(竈密察於萬物之終始、而弗爲主。(經法八行下)

8: 是故上道高而不可察也、深而不可測(測)也。顯明弗能爲名、廣大弗能爲刑(形)。(道原一七〇行上)

9: 尊【而不驕、恭】也、言尊而不可【己】事君與師長者、弗尊(謂)共(恭)矣。(五行二六九行)

10: 无罪而殺人、有死弗爲之矣。(五行二六一行)

11: 居而不聞尊長者、不義則弗爲之矣、何居? (五行三二〇行)

12: □如此其甚也、交諸父母之廊(側)、爲諸? 則有死弗爲之矣。(五行三四一行)

13: 弗【畏】張禦、果也。(五行二五八行)

(c) 自動詞・形容詞の前に用いられた例(實例なし)。

さて右の三種の用法のうち、用例の大多数を占めるaは分用規則に

| 用法 | 老子                 | 乙本付古佚書 |    |    | 五行                 | 戰國縱<br>橫家書         | 合計  |
|----|--------------------|--------|----|----|--------------------|--------------------|-----|
|    |                    | 經法     | 稱  | 道原 |                    |                    |     |
| a  | 35                 | 6      | 14 | 6  | 30                 | 25                 | 116 |
| b  | 2                  | 1      | 0  | 2  | 5                  | 0                  | 10  |
| c  | 0                  | 0      | 0  | 0  | 0                  | 0                  | 0   |
| 合計 | 37 <sup>(24)</sup> | 7      | 14 | 8  | 35 <sup>(24)</sup> | 25 <sup>(24)</sup> | 126 |

合うものである。bはそれに合わないよ  
うに見える例であるが、しかしそれらを  
吟味すると、實質的な例外は更に減少す  
る。例6から例9までは、「弗」に續く  
動詞が二重目的語を取りうるものであ  
る。そこでたとえば「弗爲主」は「不之  
爲主」と読みかえることができる。例  
10、11、12は「弗爲之矣」の例で、これ  
については「弗」と「之」との共起に關  
する前章の所論をあてはめて理解でき  
る。これらを除くと實質的例外と言える  
ものは例13の僅か一例のみとなるが、こ  
れについても解釋可能性のあることは、  
前章に記したとおりである。

ところで『老子乙本』について「不」  
の用例を調べてみると全部で一五三例  
(名詞「不殺」の「不」を除く)用いられて  
おり、そのうち目的語を伴なった動詞を否定した例は四〇例、二六%  
(二重目的語を取りうる動詞を否定した一例を除く)を占めている。「弗」  
がこの用法に用いられた例は、全資料についても例13の一例のみであ  
ることと較べてその差は歴然としており、黄景欣氏の「假象」説がこ  
の資料についても成り立たないことは明らかである。

ここで「弗」の使用比率に關して一言觸れておきたい。「弗」の使  
用可能な位置に「弗」「不」がどの程度の割合で用いられているのか  
を、『老子乙本』と『史記』とを對比して調べたのが次の表である。

|      | 弗                  | 不                  |
|------|--------------------|--------------------|
| 老子   | 37<br>(88%)        | 5<br>(12%)         |
| 史記   | 27<br>(36%)        | 48<br>(64%)        |
| 劉袁東本 | 0<br>10<br>7<br>10 | 7<br>10<br>4<br>26 |

但し『史記』については任意の四篇（劉敬叔孫通列傳・袁盎鼂錯列傳・東越列傳・太史公自序）を選んで調査した。

右表からわかるように、『老子乙本』では「弗」が可能な場合、「弗」が九割に近い高率で用いられている。

『史記』では四割に満たぬことと較べても、『老子乙本』では「弗」がかなりの高頻度で用いられていると言えよう。これが『老子』獨特の文體であるのか、それとも漢初に於ける「弗」の用法の變化を反映したものであるのかは速断することはできないが、帛書『老子』に於ける「弗」の用法の特色として、注目に値するものであると考えられる。

ちなみに馬王堆帛書に於ける「勿」の使用状況については、用例數は多くないけれども全て分用規則に合うものばかりである（『老子乙本』三例、『經法』二例、『稱』一例、『戰國縱橫家書』六例の計二二例。『道原』『五行』には用例なし）。「毋」は、『老子乙本』では九例用いられているが（「無」の意味を表す動詞として用いられた例を除く）そのうち七例が目的語を伴っている動詞を否定する例、残る二例が自動詞を否定する例である。詳論は省き、ここでは参考として『老子乙本』に於ける用例を若干擧げておくにとどめる。

「勿」の用例（全三例）

- ・小國寡民、使有十百人器而勿用。（二〇四行下）
- ・果而毋驕、果而勿矜、果而毋伐。（二四五行上）
- ・兵者不祥【之】器也、不得已而用之、銛櫓爲上、勿美也。（二四六

行下）

「毋」の用例（全九例）

- ・毋仲（狎）其所居、毋獸（厭）其所生。（二二〇行下）
- ・戴營柙（魄）抱一、能毋離乎？（二二四行下）

五 「弗」から「不」への書き換え

現行本『老子』の「不」が、漢代初期のテキストでは、丁氏の分用説に合う環境下でしばしば「弗」と書かれていたことは、前記のように帛書本から實證される他、『淮南子』に引かれた『老子』の次のような例からも窺うことができる。

故老子曰：道沖而用之、又弗盈也。（道應訓）：殿本老子第四章

「道沖而用之、或不盈。」

。是以處上而民弗重、居前而衆弗害。（原道訓）：殿本老子第六六章

「是以聖人處上而民不重、處前而民不害。」

『老子』の原本も従つてこのようであつたと考えられるのである。

それでは原本以来の「弗」が現行本では「不」に改められているのはなぜであろうか。私は、漢の昭帝劉弗の諱を避けた結果に他ならぬと考える。

次頁の表は、『老子乙本』に用いられている西漢歴代皇帝の諱字が、現行本（道藏傳奕本）でどのように書かれているかを調べたものである。

この表からわかるように、高祖、文帝、景帝の諱は現行本では厳しく避けられ、代字に置き換えられている。ただ惠帝の諱だけは置き換えが不徹底だが、これは「盈」が押韻字にあたることが多いことに原因を求められる。『乙本』の八例の「盈」のうち六例が押韻字にあ

| 皇帝 | 諱 <sup>(28)</sup> | 代字 | 乙本<br>諱字數         | 本本<br>諱字數 | 現行本<br>代字                              |
|----|-------------------|----|-------------------|-----------|--|
| 高祖 | 邦                 | 國  | 0 <sup>(29)</sup> | 1         | 満3, 傾1<br>常20, 相當字なし4<br>開3<br>不36, 莫1 |
| 惠帝 | 盈                 | 滿  | 8                 | 4         |  |
| 文帝 | 恒                 | 常  | 24                | 0         |  |
| 景帝 | 啓                 | 開  | 3                 | 0         |  |
| 武帝 | 徹                 | 通  | 0                 | 0         |  |
| 昭帝 | 弗                 | 不  | 37                | 0         |  |
| 宣帝 | 詢                 | 謀  | 0                 | 0         |  |
| 元帝 | 奭                 | 盛  | 0                 | 0         |  |
| 成帝 | 欣                 | 俊  | 0                 | 0         |  |

。大成若缺、其用不弊。大滿若虛、其用不窮。(傳奕本四五章)「大満」は武英殿本など「大盈」につくるテキストが多く、その場合「成」「盈」で押韻する。

押韻字であるにせよ「盈」が保存されているのは、惠帝が在位年數も短く影のうすい皇帝であつたことと關係あるのかもしれないが、あるいは、一旦は「満」に改められたが、押韻字であることを考慮して後世再び「盈」に戻された可能性もあろう。いずれにせよ、惠帝の諱「盈」の使用には大抵しかるべき理由が考えられるのであり、現行本「老子」に「弗」が少ないのは昭帝に對する避諱の結果だとみることがを妨

上古中國語の否定詞「弗」「不」の使い分けについて

るが、『傳奕本』では三例が「盈」のまま、一例が「傾」、二例が「満」となっている。しかし「満」につくる二例は、『傳奕本』以外の現行本では「盈」につくるものが多い。

昔之得一者、天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生、王侯得一以爲天下貞。(傳奕本三九章) 清、寧、靈、盈、生、貞は耕部押韻。

故無有之相生、難易之相成、長短之相形、高下之相傾、：(傳奕本二章) 生、成、形、傾は耕部押韻。

げない。これ以外に現行本に「弗」がほとんど見られぬことを説明する途はないであろう。

本來あつた「弗」が避諱のために「不」に置き換えられたという事情は、現行本で「弗」の少ない他の書物についてもありうることであつる。朱・裘氏のあげる『孫子』『晏子』もそのような書物であろう。

いま、出土本のない『論語』についてこの可能性を考えてみたい。現在の『論語』には、「不」の五四九例に對して「弗」は僅か五例しか用いられていないが、『史記』の『孔子世家』及び『仲尼弟子列傳』に於ける『論語』の引用文を調べてみると、

- 。吾老矣、不能用也。(微子)
- 。夫子之言性與天道、不可得而聞也。(公冶長)
- 。舉一隅、不以三隅反、則不復也。(述而)
- 。夫君子之居喪、食旨不甘、聞樂不樂、居處不安、故不爲也。(陽貨)
- 。子曰：可以爲難矣。仁則吾不知也。(憲問)
- 。南宮括問於孔子曰：：：夫子不答。(靈問)

の少なくとも六例の『論語』の「不」を『史記』では「弗」につくり、それらはいずれも分用規則に合う。これは、他の書物の「弗」が『史記』に引用されると「不」に作ることが多いのに比べて、正に異例であると言つてよい。原本『論語』では「弗」の用例はかなりあつたのではないかと推測されるのである。

現在の『論語』は、元帝の頃皇太子に『論語』を教えていた安昌侯張禹の傳えたテキストが原流をなすとされる。してみると現行本『論語』に「弗」の用例が僅少であるのは、張禹が皇太子に教える際に漢室の諱を避ける必要があつたからではあるまいか。高祖の諱「邦」は



現行本で多数用いられているが、遠祖については避諱がそれほど嚴格でなかったためと理解できよう。惠帝から武帝までについては諱字・代字とも用例数が少ないので、避諱の状況はよくわからない。

宣帝の五鳳三年（前五五年）に死んだ中山懷王劉修を葬ったとされる八角廓漢墓から、一九七三年に『論語』が出土している。この『論語』は唐山大地震による破損が報じられているが、もしこの内容が公にされたなら、右の推測の當否が明らかになるかもしれない。

## 六 卜辭、金文の「弗」

殷卜辭、西周金文及び『尚書』等最古層の文獻に於ける「弗」「勿」には、丁聲樹氏らの分用説のあてはまらないことは既に述べたとおりである。そこで黄景欣氏は、たとえ晩周時代に分用が認められるとしても、漢代以後再び分用の見られない甲骨文の状態に逆もどりするようなことは不可解であるとして、「弗」「不」の否定副詞としての機能は、甲骨文以來漢代に至るまで殆ど變化なく同一であると結論づけたのである。

しかし Serrys 氏や高嶋謙一氏らの研究によると、卜辭中の「弗」「不」「勿」「毋」には丁氏らの言うような形での分用はみられないものの、やはりある種の使い分けがあることが指摘され、それは先秦・秦漢に於ける用法とも大いに異なるものである。卜辭に於ける否定詞の使い分けは極めて複雑であり、ここにその全てを紹介することはできないが、本稿の關心に従ってごく大まかに整理すると、「弗」は先秦の文獻に較べてかなり高頻度で用いられ、目的語の有無にかかわらず専ら他動詞の否定に用いられる。従って

・貞：父乙弗尅王？（殷虛文字丙編五三）—父乙は王に祟らないか？—

の如く目的語を伴った動詞の前に「弗」が用いられている例が数多く見られるのであるが、これは先秦・秦漢の文獻に於ける例外の一般的あり方に一致することが注目される。但し他動詞であれば全て「弗」で否定できるわけではなく、「易日」（晴れる）降莫（旱魃をもたらす）のような氣象に關する意味を表わす場合や、「王亥不我殺？」（殷虛文字乙編五四〇三）のように代名詞目的語を伴った他動詞の前には「弗」は用いられず「不」が用いられる。「勿」は「弗」の場合と異なり、他動詞・自動詞を問わず用いられている。「毋」は殆ど用例がなく、その用法を正確に把握することは困難である。このように、「弗」「不」と「勿」「毋」との間に平行した使い分けの見られないことも、先秦に於ける用法との顯著な相違点である。

太田辰夫氏が言われるように、金文や詩・書等によって代表される E・A・C (Early Archaic Chinese) と『論語』『春秋』等によって代表される M・A・C (Middle Archaic Chinese) とは、兩者ともに Archaic Chinese と呼ぶことが適當かどうか疑わしい程明確な違いがある。たとえば先秦時代には一般に見られる一人稱代名詞「吾」「我」の使い分けが金文にはなく、『尚書』や金文では「其」が「周公其後」（洛誥）の如く領格を表わす助詞に用いられ、或はまた卜辭では「于」によって導かれる補語を「于大甲告邛方出」（殷虛書契後篇）—邛方が出たことを大甲に告げる—の如く動詞の前に置くことができるなど、先秦時代に較べて特異な用法をもつ單語が存在する。「弗」「勿」の甲骨文に於ける用法の特異さは、最古層の中國語の特徴を構成する一つの要素と見なしうるのではなからうか。

先秦時代の中國語は、必ずしも甲骨文・金文・『尚書』等に反映されている方言の直系の子孫ではなく、共通の祖語を戴くとしても別系

統の方言であり、場合によっては甲骨金文は、先秦一般の言語以上に先へと變化した方言を言語基盤としていたのではなからうか。「弗」「勿」の用法をめぐる卜辭・金文等と先秦一般文獻との相違を理解する少なくとも一つの方向が、ここにあると思われるのである。

### 七 合音説について

丁聲樹氏が「弗」は意味上「不之」に等しいとの分用説を提出した時、それは英語の關係代名詞 *what* が *that which* の意味に等しいと説明されるのと同様、合音を意味してはいなかった。「弗」がなぜ「不之」に相當する意味を表わし得たのかという問が發せられた時、その可能な回答の一つとして合音説が Boodberg 氏らによって立てられたのである。

先秦時代の否定文では、代名詞目的語は否定詞の直後に前置される傾向があつた。そこで「不之」はしばしば連用され、兩者が緊密に、またどんざいに發音された結果「之」は音節としての獨立性を失ない、「不」に附着して「弗」が生まれたと、Boodberg 氏や周法高氏は合音の過程を説明している。これは、近世に於て「你老」がつづまつて「恁」となり、現代北京語で「怎么」が *zen* の如く發音されるように、口頭語に於て十分起こりうることである。黄景欣氏や王方氏は、上古中國語に於て合音が起る場合には、「諸人之於」のように必ず反切を讀むような形をとるのが通例であるとして合音説を認めないが、あまりに形式的な議論と言えよう。

「弗」のもとの形である「不之+動詞」が先秦の文獻に見られないことから、太田辰夫氏のように合音説を疑う學者もある。しかし合音の生じた時期が先秦の文獻の成立よりかなり前であり、その間に「不

上古中國語の否定詞「弗」「不」の使い分けについて

之」が淘汰されて合音形「弗」のみ残ったことも考えるので、これは合音説に對する決定的な反論とはなし得ない。

「弗」「勿」は甲骨金文では「不之」「母之」を表わすものとしては用いられていなかったから、それらが合音によって始めて生じたとは考えられないという説が呂叔湘氏によって出され、合音説に對する有力な反論と見なされているようである。呂叔湘氏は自らこの問題に答えて、先秦時代には「不之」の發音が「弗」に近くなつていたために「弗」字を用いて「不之」の發音を表記する習慣が生じ、その結果「弗」は「不之」の意味をもつに至つたと説明している。梅祖麟氏もまた、先秦の「弗」は「不之」の合音によって新たに生じたもので、甲骨金文の「弗」とは別の來源をもつ單語であるとして合音説を認めている。これらは可能性としては考慮すべき説ではあるが、前章でも述べたように、甲骨金文等と先秦文獻一般とに於ける「弗」に共通の語源（即ち「不之」）を認めたいうえで、兩者の用法の相違を理解する方法もある。いずれにしても兩者に於ける「弗」の用法の相違によって合音説が斥けられることにはならないと私は考える。

合音説に對する音聲的側面からの問題點もいくつか指摘されていゝる。Boodberg 氏が「弗」の合音式を示した時、*\*pjuet < \*piet + \*tɕi* というやや中古音に接近した音價を用いたが、これは上古音で「不」の韻尾として推定される有聲子音 *\*b* が、合音の障礙となることを懸念してのことと思われる。しかしたとえ「不」の韻尾が *\*b* であつたとしても、「之」の同化によって *\*tɕi* に變じた、或は輕讀によつて脱落した等の説明が可能であり、合音説の成立を妨げるものとは言えない。

「勿」のみに生じる問題として、上古音に於て「勿」と「母」の主

母音が異なることが擧げられる。「毋」は「無」と同音で魚部の字 \**miwag* であるから、「毋之」の合音は「勿」(微部 \**miwək*) ではなく、祭部入聲の \**miwat* のような發音になるはずである。呂叔湘氏が「毋」\**miwag* が \**miu* と發音される傾向を生じて後に「勿」を以て「毋之」に代える習慣ができたと述べているのは、この問題に配慮したためであろう。この他にも、輕讀或は「不」への類推の結果「毋」の主母音が狭まり、\**miwək* と發音されるようになった可能性も考えられよう。Muller 氏は「毋」が甲骨金文では「毋」に書かれることなどを根據にして、上古音に於てもやはり之部 \**miwək* と發音されたとの説を述べている。

ここまで、合音説及びそれに對する批判説を検討してきたが、合音説を否定するに足る十分な論據はないと私は考える。そこで合音説は、「弗」「不」「勿」「毋」の分用に對する音聲面からの説明として充分成り立つことを確認しておきたい。

## 八 結 語

丁聲樹、Boodberg 氏が「弗」「不」の分用説を唱えて以來、その是非をめぐる數多くの議論が行なわれてきたが、未だ定まる所を見ない。「弗」「不」の間に傾向として分用の見られることは誰しも否定しないが、若干數存在する例外をどのように扱つかが議論の分岐點であった。本稿では黄景欣氏を始めとする諸説、及びそれらにとり擧げられている例外等を再検討した結果、「代名詞目的語」之を伴なう他動詞は、『弗』を用いて否定することができる。」という但書きを附すならば、分用説、並びに合音説は承認し得るといふ結論を得た。なほ「不之」を意味する「弗」が「之」と共起し得たかについても、合

理的な形で説明がつけられたものと考ええる。そして以上の結論は、馬王堆帛書に於ける用例調査によって更に追證されたのである。これによつて「弗」「不」分用の存否をめぐる論争に、私なりにほぼ結着をつけることができたのではないかと考えている。

もちろん全ての問題が解決されたわけではない。殊に「弗」「勿」の先秦の文獻一般に於ける用法と甲骨金文『尙書』等に於ける用法との關係については、本稿は一つの解釋を示したが、今後更に廣い視野からの研究が必要であると思われる。また、漢代以降に於ける「弗」「勿」の用法、即ち分用が行われていた時代の下限をいつとするか、分用の消滅の過程をどうとらえるか、さらには、「弗」「不」の對立は文字上は「不」に統一されたにもかかわらず、李方桂氏が指摘したように「不」が現代中國の諸方言で「弗」に由來する音に讀まれることをどう説明するかなど、論ずるべき問題は多い。これらについて私の見解を述べるのは、他の機會に俟つこととしたい。

注(1) 「弗」「不」の相違に關して、古くは後漢の何休が『春秋公羊傳』につけた「弗者不之深也。」(桓公一年及び僖公二十六年) という注がある。近代以前の學者の所説は、この何休の注をよりどころとしているものが主である。たとえば釋大典『文語解』に「弗…コノ字『不』ヨリ意オモシ。…有意ト無意トニテ差別アリ。強弱ニテ差別アリ。平上ト入聲ト語ノ緩急ニテ差別アリ。『公追齊人至蕪弗至。』春秋公羊注ニ『弗者不之深者也。』トアリ。」

(2) 丁聲樹(一九三五) 九九二頁。

(3) Boodberg (1937) 呂叔湘(一九四一) Graham (1952) 等の論文を参照。なお Booberg 氏は丁氏(一九三五)の出版される前年、『Notes on Chinese Morphology and Syntax, I』と題する非公刊の小論に於

て、「弗」「勿」の韻尾は代名詞目的語「之」の痕跡と理解されることを論じている。また周法高氏（一九五三）の指摘によれば、Gabelentz 氏は一八八一年出版の "Chinesische Grammatik" に於いて、「勿」は意味上「無之」に相當することを既に論じているという。但し「弗」については、「弗」の後では目的語「之」がしばしば省略されることと述べている。

(4) Boodberg (1937) p. 337, note 10

(5) たとえば『古漢語常用字字典』（一九七九年、商務印書館）、王力主編『古代漢語』（一九八一年修訂本）等では、「弗」が目的語を伴っていない他動詞の否定に用いられる場合の多いことは認めているが、「弗」が意味上「不之」に相當するとの記載はない。

(6) 黄景欣（一九五八）一七頁。「在古漢語中、特別是先秦古籍中、否定詞「弗」字的應用本來就比「不」字少得多、加上否定句不帶賓語是古漢語的一般慣例、「弗」字句帶有賓語的因而也就更加少了；這就造成了一種假象、使人以為否定詞「弗」字和賓語似乎是互相排斥的、……」「弗能死」は「不能死之」即ち「人民のために死ぬことができない」と解釋される。

(8) 丁聲樹（一九三五）九九二頁。

(9) 周法高（一九五三）四四頁。

(10) 「爲之十名詞」の「之」を領格の指示詞と考えるか「爲」の間接目的語と考えるかについては異論があるが、ここでは何樂士氏（一九八〇）に従い、「之」を「爲」の間接目的語と認める。

(11) 一七例を黄氏論文の用例番號によって示す。13、15、23、26、29、30、32、33、35、36、37、38、39、42、63、65、66。

(12) Graham (1952) p. 145

(13) 呂叔湘（一九四一）二〇頁。

(14) 周法高（一九五三）四五頁。

上古中國語の否定詞「弗」「不」の使い分けについて

(16) 現代中國語で例えば「我去看個朋友。」と言うとき、單用された量詞（個）は後に續く名詞が單數であることを漠然と示しているが、しかし單數であることをはっきり明示しようとする場合には、數詞「一」を添えて「我去看一個朋友。」という必要がある。これも同様のケースであると言えよう。この場合、數詞「一」の省略と、代名詞「之」が「弗」の韻尾に弱化していることが、パラレルになるのである。

(16) 周法高（一九五三）四五頁。

(17) 烏邦男『老子校正』（一九七三年、汲古書院）を参照。

(18) 朱德熙・裘錫圭（一九八二）一〇頁。

(19) 馮春田（一九八四）二八七頁。

(20) 『文物』一九七四年第七期

(21) 各資料に關して依據した釋文は次のとおりである。『老子乙本』『老子乙本卷前古佚書』『老子甲本卷後古佚書』は國家文物局古文獻研究室編『馬王堆帛書《壹》』（一九八〇年文物出版社）、『戰國縱橫家書』は中華五千年文物集刊編輯委員會編『中華五千年文物集刊帛書編一』（一九八四年）。本稿に引用する際には原則として各釋文の體例に従ったが、衍字は「」に入れて示すものとする。

(22) 韓中民（一九七四）及び李裕民（一九八一）を参照。

(23) 各資料の推定成書年代は次のとおりである。『老子』：漢初（木村英一一九五九）、『乙本卷前古佚書』：前四世紀（唐蘭一九七四）漢初或は戰國末（『馬王堆漢墓帛書《壹》』の出版説明）、『五行』：戰國後期（同上）、『戰國縱橫家書』：前三世紀以後（唐蘭一九七六、馬雍一九七六）

(24) 次の「弗」は統計から除いてある。『老子』に於ける衍字と見られる「弗」一例（二二行上）、『五行』に於ける『詩經』からの引用三例と「弗」に續く部分の缺損しているもの三例、『戰國縱橫家書』に

於ける「弗」の下文の缺損したるもの二例。

- (25) 『孝子乙本』に於て、「弗」の可能な位置に「不」が用いられている例を全て擧げておく。なお、「不可十他動詞」「不足十他動詞」は一律に「弗」の不可能な例とした。

・故天之道、利而不害、人之道、爲而弗爭。(二〇六行上)  
 ・天之道、不單(戰)而善朕(勝)、不言而善應、弗召而自來、單(担)而善謀。天罔(網)徑徑、疏而不失。(二二一行下、二二二行上)

・葆此道【者不】欲盈、是以能變(敵)而不成。(二三二行下)  
 ・自今及古、其名不去、以順衆父。(二三七行上)

- (26) 「弗」が可能かどうかは文脈に基いて私が判断したものであるから、表にあげた數値が絶対に正しいと主張するつもりはないが、相對的に見て、『孝子乙本』に於て「弗」がかなりの高頻度で用いられていることは認めてよいと思う。

- (27) 『孝子乙本』の三例の「勿」のうち、「勿用」「勿美」の二例は現行本では「不用」「不美」に作っている。

- (28) 皇帝の諱とその代字は、『漢書・帝紀』の顔師古注に引く荀悅の注に記されている。

- (29) 『孝子甲本』では「邦」が二〇例用いられているが、『乙本』では既に「國」に改められている。

- (30) 『孫子』『晏子』について「弗」以外の諱字を調べると、竹簡本には「恒」及び「斃」が散見するが、現行本では全て「常」「通」等に改められている。

- (31) かりに『論語』の原本に於て「弗」が殆ど用いられていなかったとすると、特定の書物に限っては黃氏の「假象」説が成り立つ可能性が生じることになる。

- (32) 哈佛燕京學社『論語引得』による。

- (33) 『史記』に「不」のまま引用されているもののうち、「弗」を用いても可と考えられるものは一例ある。(例)孔子對曰「荀子之不欲、雖賞之不竊。」(顏淵)

- (34) 『左傳』の「弗」が『史記』に引用されると「不」につくる場合のあることが、何樂士氏(一九八四)に指摘されている。また、『史記』と『戰國縱橫家書』とを對比すると、『戰國縱橫家書』の二二例の「弗」のうち、一一例を『史記』では「不」に作っている。逆に、『戰國縱橫家書』の「不」を『史記』で「弗」に作る例はない。

- (35) 武内義雄『論語之研究』序説二(一九三七、岩波書店)を参照。  
 (36) 漢代に遠祖に對する避諱があまり嚴格でなかったことは、陳垣『史記』譚學例』卷一を参照。

- (37) 定縣漢墓整理小組『定縣四〇號漢墓出土竹簡簡介』《文物》一九八一年第八期)

- (38) 黃景欣(一九五八)一七頁・一九頁。

- (39) Serrins (1969, 1974, 1983) 高嶋謙一(一九七三、一九八六)

- (40) 高嶋謙一氏(一九七三)二三頁によると、張秉權『殷虛文字丙編』には「不」の三四五例に對し、「弗」は一七一例用いられている。

- (41) 高嶋謙一(一九七三)六三頁。

- (42) 管變初(一九五三)四〇頁、高嶋謙一(一九七三)七六頁。

- (43) 高嶋謙一(一九七三)一六三頁。

- (44) 管變初(一九五三)三九頁。

- (45) 太田辰夫(一九六四)二頁。

- (46) 陳夢家(一九五六)九九頁。

- (47) 甲骨文に於ける「弗」の用法が先秦に於ける例外の一般的なあり方に近いことから、かつて存在した分用に混亂が生じ、「弗」の使用範圍が他動詞一般の否定に擴がった結果成立したのではないかとの疑いがもたれるのである。

- (48) Boodberg (1934) p. 430, 周法高 (一九五三) 四六頁。  
 (49) 王力 (一九四五) 二七六頁。  
 (50) 黃景欣 (一九五八) 二〇頁、王力 (一九五八) 三三六頁。  
 (51) 太田辰夫 (一九六四) 八五頁。  
 (52) 呂叔湘 (一九四二) 二二頁。  
 (53) 梅祖麟 (一九八三) 二二二頁。梅氏の説によると、「之」の聲母は上古早期(甲骨文、金文等)では[kj]であり、「不之」の合音によって「弗」が生じたとはありえないが、「上古晚期(春秋戰國)になると「之」の聲母は分音 [w] によって前舌化されて [w] となつており、その後「不之」の合音が起つて「弗」が生じたといえる。
- (54) Boodberg (1937) p. 337, note 10  
 (55) 呂叔湘 (一九四二) 二二頁。  
 (56) Mulder (1959) p. 252  
 (57) 丁聲樹 (一九三五) 九九六頁。

引用論文目録(本文・注中に出處を明記したものは除く)

- Boodberg, P.A. 1934: Note on Chinese Morphology and Syntax  
 I. The Final t of 弗 fu, Serial published by P.A. Boodberg  
 "Selected Works of Peter A. Boodberg" compiled by Alvin  
 P. Cohen, University of California Press, 1979
- 1937: Some Remarks on the Evolution of Archaic Chinese, H.J.  
 A.S. vol. 2
- 陳夢家一九五六: 殷虛卜辭綜述 科學出版社  
 丁聲樹一九三五: 釋否定詞「弗」「不」 『慶祝蔡元培先生六十五歲  
 論文集』下冊  
 馮春田一九八四: 『睡虎地秦墓竹簡』某些語法現象 『中國語文』第  
 四期

上古中國語の否定詞「弗」「不」の使い分けについて

- Graham, A.C. 1952: A Probable Fusion-word 勿 wu = 毋 wu +  
 之 jy, B.S.O.A.S. vol. 14, part 1
- 管燮初一九五三: 殷虛甲骨刻辭語法研究 中國科學院出版  
 韓中民一九七四: 長沙馬王堆漢墓帛書概論 『文物』第九期  
 何樂士一九八〇: 先秦「動・之・名」雙賓式中的「之」是否等于「其」  
 ? 『中國語文』第四期
- 一九八五: 『史記』語法特點研究 『兩漢漢語研究』所收 山東教  
 育出版社

- 黃景欣一九五八 秦漢以前古漢語中的否定詞「弗」「不」研究 『語  
 言研究』第三期
- 木村英一九五九: 老子の新研究 創文社  
 李裕民一九八一: 馬王堆帛書抄寫年代考 『考古與文物』第四期  
 呂叔湘一九四一: 論母與勿 『漢語語法論文集』所收 一九五五年科  
 學出版社
- 馬雍一九七六: 帛書『戰國縱橫家書』各篇年代和歷史背景 『戰國縱  
 橫家書』所收 文物出版社
- 梅祖麟一九八三: 跟見系字諧聲的照三系字 『中國語言學報』第一期  
 Mulder, J.F. 1959: On the Morphology of the Negatives in Archaic  
 Chinese T.P. vol. 47
- 太田辰夫一九六四: 古典中國語文法 一九八四年改訂版 汲古書院  
 Pulleyblank, E.G. 1978: Emphatic Negatives in Classical Chinese,  
 "Ancient China" Roy, D.T. and T.H. Tien ed. The Chinese  
 University Press, Hongkong
- Serruys, Paul L.-M. 1969: Negatives in the Language of the Bone  
 Inscription of Shang. A paper presented for the annual meeting  
 of the American Oriental Society
- 1974: Studies in the Language of the Shang Oracle Inscriptions

T. P. vol. 60

—1982: Towards a Grammar of the Language of the Shang Oracle Inscriptions 中央研究院國際漢學會議論文集語言文字組

鈴木直治一九七五：古代漢語の終止の位置について 『金澤大學教養部論叢』 十一號

高嶋謙—1973: Negatives in the King Wu-Ting Bone Inscriptions (Ph. D dissertation University of Washington), University Microfilms, Ann Arbor

—1986: Morphology of the Negatives in Oracle-Bone Inscriptions 1986年5月國際東方學者會議發表論文

唐蘭一九七四：黃帝四經初探 『文物』 第一〇期

—一九七六：司馬遷沒有見過的珍貴史料 『戰國縱橫家書』 所收 文物出版社

王力一九四五：中國語法理論 『王力文集』 第一卷所收 一九八四年 山東教育出版社

—一九五八：漢語史稿 一九八〇年新版 中華書局

周法高一九五三：否定詞後代詞賓語的次序 『中國古代語法·稱代編』 所收 一九七二年重刊本 台聯國風出版社

朱德熙·裘錫圭一九八一：七十年代出土的秦漢簡牘和帛書 『語文研究』 第一輯